

先日、岡山大学医学部創立 150 周年の記念式典が挙行されました。誠にめでたいことです。

配布された「大河なる軌跡—岡山大学医学部創立 150 周年—」の DVD をみて、孤児院を開設した石井十次、神経研究の上坂熊勝、日本住血吸虫発見の桂田富士郎、梅毒の特効薬を発見した秦佐八郎、胆汁酸研究の清水多栄、自ら被爆し被爆患者を治療し「ヒロシマ日記」を書いた蜂谷道彦、川崎医科大学創立の川崎祐宣、岡山県知事三木行治、アカタラセミア病発見の高原慈夫、視床研究の新見嘉兵衛、国立岡山病院名誉院長小児科医の山内逸郎、内科教授の小坂淳夫と平木潔など多くの立派な先輩のことは良く分かりました。でも、これらの記録はほぼ半世紀以前のもので、その後の現在に至るまでの記録はありません。大河は小川になったのでしょうか。あるいは、現代の記録はつくりにくいのでしょうか。

DVD の医学部の輝きに比べ、その後の半世紀、新制岡山大学医学部になって以来の軌跡は、下降気味な感じがします。その原因はいろいろ考えられます。

- 1) 第 2 次世界大戦前は、私立大学を除けば、帝国大学 6 校と官立医科大学 6 校だけで大学が少なかったため、優秀な人材が大学に集まった。戦後、多くの新制大学が出来、優秀な入学生の拡散がおこった。同時に、大学教員の質の低下もあり、また、マスプロ教育、人文系教育の軽視などの結果、幅広い教養や創造的思考力を備えた人材の育成がむずかしくなった。
- 2) 国立大学の法人化は、大学経営の効率化や産官学連携など、目先のことに重点が置かれ、大学教員がアカデミックな環境の中で、腰を据えて教育や研究に取り組めなくなった。
- 3) 知識詰め込み至上主義の初等中等教育、大学入試制度にも問題がある。

〇〇周年を祝うことは大切なことです。しかし、そのような機会を捉え、往時を参考にしながら、現状の問題点を分析し、将来の発展へのブループリントをつくることも重要だと思ふ次第です。往時をめでたい、めでたいと喜んでいては、それこそ「おめでたい」ことになります。

伝統を破らなければ、新しい進展は期待できないでしょう。